

## 11月8日「ここでお別れ!？」創世記13：1～9

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、世界中に広がる一神教、それらに共通するのは旧約聖書に現された唯一の神さまを信じること、そしてアブラハムを祖先としていることです。「え？私たちは日本人ですけど…」そう思われた方もあるかもしれません。けれども、パウロはこう伝えています。「ガラテヤ書3：7～9 信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、『あなたのゆえに異邦人は皆祝福される』という福音をアブラハムに予告しました。それで、信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されています。」私たちは神さまがアブラハムに与えた「祝福の源になるように！」との約束の基に、皆同じ祝福を受けた「一つの民」とされているのです。

さて、今日はそんな信仰の祖アブラハムとロトの別れの場面を聴きました。彼らは叔父アブラハムと甥のロトという親戚同士の関係です。それもただの親戚ではなく非常に固いきずなで結ばれた者同士でした。何千キロもの道のりを一緒に旅してきた仲間だったからです。彼らは元々バビロニアのウルの出身です。ウルからは「ジックラト」と呼ばれる大きな建造物や「ウルの大杯」と呼ばれる陶器など、たくさんの貴重な考古学的遺物が見つかっていて、大変高度な文明をもった大都市です。どうしてそこを離れなければならなくなったのか、理由は聖書には記されていません。戦争、飢饉、流行り病、何か大きな不都合があったのでしょうか。当時の旅ですから、もちろん徒歩です。それも家財道具一式、家畜などの動物もすべて連れての長距離移動です。今では考えられないくらいの大変な道のりだったでしょう。

更に困ったことに、一族の長テラは（アブラハムの父であり、ロトの祖父）は旅の途中で死んでしまいました。彼らは道半ばにしてリーダーを失い放り出されてしまったのです。何とかたどり着いたカナン地方でも、原住民とのトラブルがあり、大飢饉も起こり、1度はエジプトへの移住も余儀なくされました。二人は苦楽を共にしてきた仲間だったのです。

これまで長い困難の時を共に乗り越えてきた2人、固い友情で結ばれた

2 人を何が離れさせたのか？「6 節 その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである。」二人が別れたのは互いが豊かになったからでした。アブラハムはエジプトに下った際に、妻のサラの美しさゆえに（ある意味で利用して）エジプト王ファラオから多くの富を受け取りました。同じように、ロトも豊かになっていきました。数が増えすぎたお互いの羊飼いの間で、土地や水飲み場を巡って争いが頻発するようになりました。ついに二人は一緒に住むことが出来なくなってしまったのです。こんなに皮肉なことがあるのでしょうか。旅を通じての辛さ、苦しみ、困難では裂かれなかった二人の間柄は「豊かさ」によってあっけなく崩れ去ってしまったのです。二人は別々の土地を選んで住むことに決めました。

アブラハムは年長者として土地の選択権をロトに譲ることにしました。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」ロトが目を上げてみると、ヨルダン川の低地一体は見渡す限り良く潤っていました。ロトは豊かな土地の方を選び、アブラハムはそうではない方へと進んでいきました。神さまは大切な友人との別れを終えたアブラハムに語りかけられます。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」大きな決断を終えたアブラハムを大いなる祝福をもって励まされるのです。

コロナ禍の中で考えさせられたことの一つに今日のテーマでもある「豊かさ」がありました。私たちは人が大勢集まることは豊かになることだと思っていました。実際、日本の中でも東京、大阪、名古屋、大都会には人

が集まり、物は集まり、情報は集まり、あらゆるものが集約され豊かになる。数は力であり、富であり、祝福であると皆が思っていました。ところが、コロナによってそんな豊かさが安全ではないことが露わにされました。

教会も、私自身も（おそらく皆さんも？）これまでは、教会にたくさん人が集まって、会堂がいっぱいになることが伝道の成功で神さまの祝福だと思ってきたと思います。豊かになることが祝福だと。けれども、これからはそうもいきません。大勢が集まるのは危険なのです。それでは一体何を目標に、何を目指してやっていけば良いのでしょうか？

そんなことを思いながら、夏の子どもの教会のお楽しみ会を迎えました。本当に少人数のいつも教会にやってくる子どもたちだけを対象にしたプログラムです。小さい集まりでしたが、いつもの子どもたちと目一杯水遊びを楽しめるとても充実した時間でした。例年のキャンプであれば、大勢のためにプログラム作り、全員の把握、目配せに追われて、くたくたになりますが、違う充実感がありました。小さな集まりでも、深い繋がりの中にとっても大きな祝福と豊かさを感じました。

今日、子どもの教会では同じ創世記のバベルの塔の物語を読みました。大きな塔を造ろうと1つのところに集まってきた人間の傲慢を神さまは打ち砕き、バラバラにして各地に散らされたと言います。この物語の背景には、バビロン捕囚の際に、イスラエルの人たちが連れていかれたバビロニアで（つまりアブラハムの故郷で）天にも届くかと言うジックラトの高い塔を見上げ、打ちのめされた経験があるのではとも言われます。「バベル（バラバラになる）」とはバビロニアのことなのです。豊かさを神に並ぶ自らの力と勘違いした人間を神さまはバラバラにされます。そして、ペテコステの日に示されたように、色んな言葉で色んな人たちと愛し合って共に生きていく多様さの中にこそ、神さまは霊を注がれるのです。

さて、アブラハムの話に戻って、この後、物語はどうなるかご存じでしょうか？豊かなヨルダン川流域の低地一体ソドムとゴモラの地方を選んで進んでいったロトに待っていたのは、神による裁きと滅びでした。悪に満ちたソドムとゴモラの街を神は滅ぼされたのです。豊かさには私たちを

惹きつける強い誘惑がありますが、それは滅びと表裏一体であることを聖書は伝えます。「**マタイ 6:24 だれも、二人の主人に仕えることはできない。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。**」豊かさには大きな誘惑があるが、それは滅びへの道に通ずることを私たちは自覚すべきかもしれません。

今日も行っていますが、インターネットを通じての配信を始めた。こういうのを始めると再生回数が表示されるのです。気になります、どうしても気になります。世の中には何百万回、何億回と再生される動画もある。そういう動画を配信出来る人はそれだけでたくさんのお金を稼げるらしいです。私も出来ることなら100万回再生とか、牧師ユーチューバーとか呼ばれてみたいなあと思ったりもします。ちなみに、先週の礼拝の動画の再生回数は・・・4回！がっくし\_ | \_ | ○ 道は遠いです。

けれども、続けていると最近嬉しい電話も聴くようになりました。多度津教会出身で今は遠方におられる方からです。「まるで多度津に帰ったようで、とても懐かしい気持ちで礼拝を見せて頂いています。」こちらも遠方におられる遺族の方から。「母の遺影の前で配信を見て、天国の母と一緒に礼拝している気持ちになります」インドネシアからも「いいね」が届いています。たとえ数人にしか見られていなくとも、再生回数は少なくとも、この働きを始めてよかったなと思った瞬間でした。私はこの小さくとも信仰と祈りで通じ合う深い関係の中に、本当の豊かさがあるように思うのです。この小さな祈りの輪を増やしていくことがコロナ禍における新しい教会様式なのではないでしょうか？イエスの言葉。「マタイ 18:20 二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」